

ホーソン文学における「罪の意識」

—「イーサン・ブランド」を中心にして—

柿 沼 美 代 子

I.

ホーソンは、晩年に至って『緋文字』*The Scarlet Letter*, 1850, 『七破風の家』*The House of Seven Gables*, 1851, 『ブライスデイル物語』*The Blithedale Romance*, 1852, と長篇を3冊やつぎ早々に制作したあと、さらに60年に『大理石の牧神』*Marble Faun* を発表し、1864年5月18日 New Hampshire の Plymouth において60歳で客死した作家であったが、しかし、長篇を書く前に彼は数多くの短篇を制作した。

1825年 Bowdoin 大学卒業後 Salem の「のきの下の部屋」(chamber under the caves) に戻り、以後12年間に亘る長い文学修業の時代を送った。世間一般に信じこまれているほど厳しい「孤独」の時代でなかったことは、多くの批評家や伝記が伝えるところであるが、いずれにしても読むことと書くことを中心にした思索生活を送ったのは事実であったであろう。世捨人的な孤独な生活を送っていなかったのは、たとえば1828年には学生時代から構想を進めていた『ファンショウ』*Fanshawe: A Tale* が匿名ではあったが世に問われたり(といっても、ホーソンは後にできるだけ多くの同書を市場から回収し、それをすべて焼き捨てている)、1830年に *The Salem Gazette* に「三つの丘のくぼみ」*The Hollow of the Three Hills* が発表され、彼の原稿がはじめて活字になって以来ひきつづき各種の定期行物に短篇を発表している、などの事実から推しても肯定できるであろう。

つまり彼が晩年四つの長篇(未完の長篇『グリムショウ博士の秘密』*Doctor Grimshawe's Secret* を加えれば五篇)で花開かせた文学の世界は、少なくとも外面的には1830年からほぼ20年に亘る短篇制作によって準備されたものである、ということができよう。長篇に描かれる人生観や描写の仕方は、場面設定の多様性にもかかわらず、短篇に描かれるものと大きく変わっているところは認められないのである。

彼の人生観とは、極く大まかにいって、すべての人生問題を外面的にでもなく、また理性によってでもない、どこまでもそれを受け止める「心」の問題として見ていこうとする姿勢、つまり事実でなく徹底的に心的真実を大事にしようとする態度である。この姿勢は当然彼の描き方にも投影してくる。

彼の描く世界は客観的で自然的な世界——リアリティ——をある程度犠牲にした世界であることが多い。彼の文学には超自然的なもの、魔法などが行われていた古い時代のもの、リアリスティックな世界にあっては納得できないことなどが描かれることが多いが、それは心的真実を大事にしようとするホーソン自身の姿勢から必然的に起る結果であったであろう。挿入されるエピソードが象徴的な意味を持つことが多いこと、物語全体がアレゴリカルであることが多いことなども同様である。極言すれば、彼の描く世界は心的真実を尊重するためには、魔法使いの跋扈する世界をリアリスティックな世界の代りに使うことさえ辞さないのである。

このようにして作り上げられた彼の作品は、多く「ロマンス」の名で呼ばれている。じっさいホーソンは、夢の世界を創作の場に設定するロマンスの重要性を、『ブライスデイル物語』のはしがきをはじめ、いろいろの折に記している。18世紀的な作家と批判されるのは、19世紀においてすでに古語となっていた語を多用したからだけではなく、本質的には、あまりにもリアリティを犠牲にした作風そのものに対するものであるであろうが、この作風のもたらす功罪は、ここで簡単に決定することのできない、様々なしかも小論が目的とするものとは別の問題を含んでいる。

さて、リアリティを犠牲にして無限に心的真実に接近しようとする彼の思索は、当然人間存在は「如何にあるべきか」を指向している。そして彼が認めた人間存在とは、「罪」と離れがたく結びついている悪の可能性を秘めた存在であった。人間は、もっとも崇高なはずの牧師から残酷な殺人鬼に至るすべてが「罪」という絆によって兄弟であるという認識は、いきおい彼の文学を暗いものにしてしまわざるを得ない。彼は、H. メルヴィル、W. フォークナーなどと共に、人間の心の暗闇を探った作家といわれているが、そのことは最初の「三つの丘のくぼみ」以来のすべての作品によって明らかである。

ホーソンは、「罪」は人間存在そのものの一部であるという認識を持っている。その意味で彼は悲観論者であり、運命論者であろう。エマソンを代表とする超絶主義者に一時ひかれながら、そしてじっさいに1840年初頭の2年足らずをブルック・ファーム Brook Farm での実験農場に参加しながら、結局そこに安住できなかったのには、彼自身が共同生活を耐えがたいと思ひ、またその共同生活によって創作活動の暇

を奪われたから、という現実的な理由以上に、彼らの人間存在に対する楽観的な観方についていけないのが根本的な理由であったと思われる。

人間は悪に転落することなしに生きていくことができ、転落しないことによってやがて理想郷を実現できる、という楽観論は、悲観論者のホーソンがとうてい受け入れることのない哲学であるのは明らかであろう。

ホーソンのいう「罪」が行為の中に現れた「犯罪」に近い罪を意味しているのではなく、心の持ち方に関するものであるのはいうまでもない。1837年発表の「幻ののぞき眼鏡」Fancy's Show Box は、そういうホーソンの考えをもっとも鮮かに示しているであろう。心の持ち方はやがて外面に現れてくるから、多くの場合、表情、服装、行為などの可視的なものを通して描かれはするが、その場合にもホーソンは、内面への言及を怠ることは決してしない。彼の関心は、常に内部にある。

そのような罪の存在である人間は、どう生きればよいのか。罪はどのような様相を呈するに至るのか、そしてその結果は、罪人に、そして同時に他者にどのような影響を及ぼしていくのか。また、このような罪の存在が果して救われる可能性はあるのか、あるとすれば一体それは何か。こうした問題の解決こそは、恐らくホーソンの文学が指向する方向であろう。

この辺に人間疎外化を早めつつある20世紀の現在、ホーソンが再び広く読まれる理由が潜んでいるように思う（といってもホーソンにはやはり19世紀的な限界があったと一応考えられる。人間存在に鋭く肉薄し、それについて深い認識を得はしたが、その認識を基にしての救いに至る道は、必ずしも明確にしなかった）。この救いに至る道の探求こそは、20世紀の人間の

テーマであるからである。(しかしこの問題について現時点の私の研究では断定的なことをいうべきではないので、やがて別稿で論じたい。)

既に述べたところから明らかなように、人間はさまざまな悪の局面を持っているとホーソンは考えている。どの局面をもっとも許し難いと考えるかは、その人の立場や環境によって違ってくる。『緋文字』のチリングワースのように、自己の悪を見つめず、他者の心の悪を白日の元に曝すのに無上の喜びを感じずるもの、逆に自己の悪に圧倒されますます自己の殻の中に退行してしまう「牧師の黒いヴェール」*The Minister's Black Veil* (1836) の牧師のような者、自尊心から自己を他者から区別することによってわれとわが身を人間同胞から切断してしまった「貴婦人エレノアのマント」*Lady Eleanor's Mantle* (1838) のエレノオのような者、過去の愚行や犯罪に基く罪の意識の重さに耐え切れず破滅していった『緋文字』のドライスデール牧師や「三つの丘のくぼみ」の女性をはじめとする一群の人々……等々、さまざまである。「若いグッドマン・ブラウン」の主人公のように、この世に悪の存在そのものを許せなくなり、自らを灰色の人間に変えてしまう者さえいる。

このように動機はさまざまであるが、その動機を持つことからくる結末は、個々の連帯からの孤立である。ホーソンは、動機のいかんにかかわらず個の孤立を、人間の責任の放棄であり、最大の罪であると考えていたようである。そして連帯に復帰すること——参加 *participation* を、罪からの解放と考え、贖罪と考え、これに最高の価値を置こうとした。ホーソンの文学は、やや図式的にいうなら、常に一方に理想たる連帯を意識しつつ、悪の存在たる人間がいかにして孤立に立ち至るのかをその動機にまで遡って、考え得るだけ多様な場面を見きわめよ

うとするところに、その特質があるといえるであろう。

先程述べたように、連帯に至る具体的な道は必ずしも明確に描かれてはいない。個から連帯への繋がり必然を、説得力を以って描くことは、ホーソンに限らず聖書の昔から至難の業であった。ヘスター・プリンははじめ、『大理石の牧神』の主人公など幾人かは贖罪の生活の後に連帯復帰への希望を抱かせる人物もいるが、より多くの人物が孤立という罪によって亡んでいく、という暗い世界がホーソンの世界であろう。

ホーソン文学の概観が聊か長すぎたかもしれない。小論では「イーサン・ブランド」*Ethan Brand* を中心にして罪の諸相をもっと具体的に見ていきたい。この作品を選んだのは、これが短篇から長篇にむかう頃の1851年に発表されているためである。罪の諸相がかなり総括的に描かれていると思うからである。

II.

バートラム *Bartram* 父子は、グレイロック山の麓で石灰を焼いている。彼らの使っている窯はもとイーサン・ブランドのものであったが、彼が18年前に「許されざる罪」*Unpardonable Sin* を追求してオールド・グレイロックの村を出て以来使用されていなかったのを、遅くこの村に入ったバートラム父子が使うようになっていたのである。18年後の今宵、ブランドはバートラムの子供をおびやかすような大声で喚きながら元の窯に戻り、父子の前に姿を現し、遂に「許されざる罪」を発見したので戻ってきた由を話す。「その許されざる罪は何処にあったんだい」と尋ねるバートラムに対して、ブランドは自分の胸に指をおいて、「ここだよ」と答える。その時の表情は次のように述べら

れる。

顔には喜びの表情は少しもなかったが、一番身近にあるものを世界中探し歩き、他人の胸にあるはずのないものを、他の者たちの心の中ばかり覗いて自分の心を覗かなかった途方もない愚かしさが自然と思い出されたかのように、彼は突然自嘲の笑いをあげたり。

この笑いは純心な子供を震え上らせ、山腹を陰惨にする不気味な笑いである。また鈍感な石灰焼きの男の神経を動転させる笑いでもあった。それもその筈で、この男は「許されざる罪」の探求によって自らを悪魔に変え、自分の心臓を冷たい大理石に変え、人間的共感を失ってしまった男であったのである（しかしこのことは作品の最後まで明らかにされない）。だが、父がブランドの帰還を村人たちに知らせるため、子供を送り出してブランドと一対一で向きあった時、父の胸は不思議にもこの不気味な男の胸との間に強い共感を感じるのである。

不気味などす黒さをたたえたその罪は、彼 [= パートラム] に蔽いかぶさってくるように思え、彼の胸は、人間の墮落した性質が想像し思い抱けるうちで最高の大罪——たとえそれが何であれ——と同類であることを主張する諸々の悪の姿で騒々しくなった。それらはみんな同類のものであった。それは彼の胸とイーサン・ブランドの胸との間を飛びかい、どす黒い挨拶を交しあった²⁾。

この一節はホーソンの認識である罪の遍在性を述べているであろう。パートラムとブランドは、いろいろな点对照的に描かれている。パートラムは鈍感で、思索的でない男として描かれ、ブランドはこれから述べられるように、石灰窯の火を見つめながら深い思索にふける男であった。

このように違うタイプの人間の間にも罪の共

感は存在している。罪を離れられない点で人間はすべて兄弟であるとするホーソンの認識であろう。彼はユニテリアン派の雰囲気の中で育ったが、祖先から受けつがれてきたカルヴィン派的傾向をむしろ強くみせている。原罪をその中心的な教義とするこの派にあっては、救済の前に先ず罪の遍在性が問題となる。

ところで「許されざる罪」とは一体何のことであるのか。石灰焼きの質問にブランドは次のように答える。

「それは私自身の胸に育った罪なのさ」と、イーサン・ブランドは、この種の情熱家特有の誇りに胸をそらして答えた。「ほかのところにはどこにも育たない罪なのさ！ 人間との同胞感や神への尊敬をおろそかにし、その要求のためにすべてを犠牲にした知性の罪なのさ。その報いに永劫の苦悩を受ける価値のある罪は、これ一つだけなのだ……。」³⁾

「同胞感や神への尊敬をおろそかにした知性の罪」——「心」を「知性(頭脳)」によって押し潰すこの罪を、ホーソンは多くの作品でいろいろなヴァリエーションを使って描いた。この大罪にはいろいろな罪が含まれている。他者と同様有限であり、悪の芽を持つ自己を殊更に他者とは違うと考えたい驕りや自負心に基く罪、その自負心によって他者を同胞としてでなく、軽蔑と実験の対象にする罪、他者とひとしく被創造の身であるのを忘れ、「頭脳」を信ずることによって創造主をないがしろにし、あわよくば自分が創造主になり代ることで真の創造主が造り出したものを勝手に直そうとさえる不敬な罪……等々。これは、数ある罪の中でもっとも大きな罪であり、まさに「許されざる罪」なのである。

ホーソンは、1851年発表のこの作品以前に、

個々の罪の様相やその影響について数多くの作品につぶさに描いてきた。自負心を中心にしたものとしては、「貴婦人 エレノーの マント」(1838) や「無情の男」The Man of Adamant (1837) などがその典型であり、「頭脳」によって創造主になり代ろうとしたものとしては、「あざ」Birthmark (1843) や「ラパチニの娘」Rappaccini's Daughter (1844) などが代表的なものであろう。

だが、イーサン・ブランドはどのようにして自己の胸の中に「許されざる罪」を発見していったのであろうか、また「許されざる罪」は彼にどのような結果をもたらしたのか。

まず結果について、一言でいうなら、それは彼を他者から完全に切り離したということである。それは彼の笑いがパートラムの子供を驚かせ、山腹を陰惨にしたという最初の記述ですでに暗示されているが、村からやって来る群衆——特に彼に馴染みの深い3人——に対する彼の態度によって、一層明確にされている。

駅馬車の世話人、元は立派な弁護士でありながら、飲酒癖のためすっかり零落し、その上片足と片手を失ってもはや一片の人間 (a fragment of a human being) としか呼べなくなってしまったジャイルズ (Giles)、立派な腕を持ちながら同じように酒に身を持ちくずしてしまった村の医者——彼らは、たしかに悪の誘惑に負けてしまった人間の群である。善を指向する力が併在するにもかかわらず、もっぱら悪の囁きに身をまかせた弱者の群である。村の医者の場合のように、いま一步というところで他者への悪意や呪いに変ってしまいかねない者さえいる。だが彼らは、それでも同胞感を失ってはいない。「心」を失ってはいないのだ。酒によって「頭脳」を失い、ある者は「心」の侵略がある程度うけながら、なお同胞の中に踏みとどま

っている者たちなのである。

彼らが差し出す酒は、ブランドに同胞への復帰を可能にする力を持っていた。そしてじっさいそれは、一瞬大理石と化したブランドの心に「温かさ」を与えるものであった。しかしブランドにとっては、それは憎むべきたじろぎとしか感じられない。他者とは違うのだというかたくなな自負心が彼らとの間に同胞性を認めさせないのである。

「俺のもとを去るんだ」と彼は厳しい口調で言った。「このけだもの野郎ども、火のような酒で魂をしながら、好きこんで獣みたいになりやがった、お前たちには用はない。ずっと昔に潜りこみ、俺の探すものがないのはわかっているんだ。さっさと行ってしまえ、」¹⁾

と喚くばかりである。この時の彼には他者に対する軽蔑こそあるが、自己の驕り、心を大理石に変えたことに対する反省や罪の意識はまだ明確ではない。彼が最初から発している哄笑は、自己の一番近くにあったものを求めて世界中を歩き回った滑稽さを笑ったのであり、遂に求めるものを得た彼が、他者を軽蔑した笑いであって、同胞から離れてしまった絶望の笑いではない。その彼に明確な罪の意識をよみ返らせる原因となったものは、1. 彼が心理的実験のために遂に亡ぼしてしまった娘の父の哀れな姿、2. ジオラマ、3. 自分の尾に噛み付こうとして無駄な回転を繰り返す雑犬の三つであった。

ブランドは他者に共感を抱く代りに、他者を利用し、実験の対象とすることによって知性を深めてきた。1人の娘の心を徹底的に覗き込むことによって彼は心理的な真実を知ることができたが、娘はそのために破滅してしまった。恐らく彼女の愛を彼の理性によって裏切ったのであろう。その娘の帰りを待ち望んでいる哀れな

父親の姿と娘への深い愛情は、ブランドに最初の罪の意識を呼び覚ますにはおかないのである。じっさいブランドは、この老人の視線にたじろぎを感ずるのである⁹⁾。

第二の原因となったジオラマについてである。ドイツ系ユダヤ人の見せ物は、村の若者を楽ませ、バートラムの子供を歓ばせるものである。拡大鏡を通してジオラマを見ていたバートラムの息子は、同じようにジオラマを覗いている拡大されたブランドの目を見て震え上ってしまう。

ここで問題なのは子供が震え上ったことではなくて、ユダヤ人が「面白いものを見せてあげよう」とブランドにいったにもかかわらず、ブランドの見たものは「無」であった、という2人のドラマである。

イーサン・ブランドは一瞬箱の中を覗いて、すぐはっとして後へさがり、ドイツ人をじっと見すえた。彼は何を見たのか。明らかに何も見なかったのである。というのは、好奇心からほとんど同じ瞬間にのぞいた若者の見たものは、何も描いていない画布にすぎなかったからである。(中略)

「ああ、大将」と、ニューレンベルグのユダヤ人は曖昧なほほえみを浮べて囁いた。

「この許されざる罪をこの箱に入れて歩くのは重いものですよ。……」¹⁰⁾

見せ物師が何も描いてない画布を見せたに過ぎなかったのは、若者の証人を出していることから確実である。問題は、絵のない画布を見せたことの象徴的意味を考えることである。ホーソンが象徴的でアレゴリカルな傾向の強い作家であるのはいいふるされたことであり、小論でも最初に述べたところである。彼は現実を見たままに描くのではなく、現実から蒸溜して得た真実をより効果的に表現するために挿話を多用する作家であった。この見せ物師のドラマ

は、苦勞して得た「許されざる罪」が、じっさいに人間的な価値から判定する時、「無」でしかないことを示すための挿話である。「黙れ、でないとおそこの窯の中にお前を放り込むぞ」¹¹⁾とブランドはいいながら、やがて自己反省に向かわざるを得ないのである。

そして次の雑犬の回転によって、彼は自分の苦勞が徒勞でしかなかったのかもしれないという気持と、罪の意識、絶望は遂に絶対的なものになっていく。犬は短い尻尾に噛み付こうとして無駄にきりきり舞いを繰り返した挙句、「やがて完全に疲れ果て、目指す尻尾には最初と同じ距離を隔てたまま、演技を始めたのと同じ唐突さでやめてしまった」¹²⁾という出来事を見ていたブランドは、犬の行動と自分の探求の旅との間に奇妙なほどの類似性を認めるのである。

…恐らく彼自身の場合とこの自分を追いかける雑犬の場合との間にあるかすかな類似性を認めて感慨に耐えなかったのであろう、彼は突然恐い笑い声を発し出した。それは他のどんなしるしにもまして、彼の心の状態を示すものだった。その瞬間から一行の馬鹿騒ぎは消えてしまった。

この笑いは、山々を震わし、人々を村に追い返すのに充分なほど恐い笑いであった¹³⁾。

以上述べてきた三つの原因によって、ブランドの心には罪の意識と絶望とに至るためのある変化が起っている。この恐い笑いは、最初の笑いに比べて彼の絶望をいっそう濃く漂わしているであろう。

心の中にある変化の起ったブランドは、その変化が何であり、何に基くのかを考えざるを得ない。もう寝るがいい、と勧めるといふよりむしろ命令するよういふバートラムに対して「俺自身はとて眠れない。考えなければならぬ問題があるから。火は俺が見てやろう、どうせ昔やっていたことだ。」¹⁴⁾というブランドの

言葉は、そのことを伝えるものである。

漸く1人になったブランドは、18年以上の昔そのままに、扉の破れ目から吹き出す火の閃光を見入りながら、来し方を振り返って長い瞑想にふけるのである。この瞑想は、彼が「許されざる罪」をどのように発見していったのかを読者に明らかにする。

彼は心の奥底で、今まで全力をつくしてやってきた探求が彼に及ぼしたゆっくりにしているがしかし驚くべき変化を、振り返っていた¹¹⁾。

彼には、「燃える火を見つめながら絶えず物思に耽っていた素朴で愛すべき人間であった¹²⁾時代もあった。その頃の彼は「暖かい優しい気持、人間に対する愛と同情、人間の罪や悲しみに対する憐れみ¹³⁾」を豊かに持っていた。「人間の心を元々神聖な寺のように考え、いかに汚れていても、同胞としてあくまで神聖なものともみななければならない¹⁴⁾」と考えていた。だが「やがて大きな知能の発達が起こって、その時理性と感情の均衡を乱してしまった。¹⁵⁾」彼は知能を徹底的に発展させ、「今までの無学の労働者の段階から、星の輝く高地に立つ¹⁶⁾」大学者、大哲学者になった。

知性の方はそれでいい。しかし感情はどこへ行ってしまったのか。じっさい、それは萎み、縮んで固くなり、そして死んでしまった！ それはすべての人間の鼓動に参与することをやめてしまった。人類の磁石のように引きあう鎖を手放してしまったのだ。彼はもはや人類の一員ではなくなった(中略)。今や彼は人類を実験の対象としか考えない冷酷な観察者になり、遂には男も女も操り人形に変えてしまい、彼の研究に必要な程度に彼らが罪を犯すように糸をひっぱるようになってしまった¹⁷⁾。

このように「道徳性が知性と歩調をそろえて

向上するのをやめた瞬間¹⁸⁾から「イーサン・ブランドは、悪魔になってしまった¹⁹⁾」のであった。ここに「許されざる罪」の探求は完成したのである。

だが、この探求が結局は人生の積極的な価値を作り出す点からは、「無」であり徒勞であったことを、前述の三つの原因によって彼は悟った。人類の鎖から放れてしまった彼にはもはや復帰への道はない。後戻りはできない。彼は自己の自由において過去築き上げた規範に沿って生きつづけ、それ相応の報いを受けざるを得ないのである。

従って「俺の仕事は終わった。しかもみごとに終わった！」²⁰⁾という叫びを、探求の果てに遂に「許されざる罪」を発見した歓びに基く叫びと考えるべきではない。これは自嘲と絶望の叫びなのである。そうでなければ、「おお、母なる大地よ、おん身はもはや俺の母ではない。この身が融けておん身の胸に抱かれることは決してないだろう。おお人類よ、俺は汝の同胞の絆を破り捨て、汝の偉大な心をふみにじった。」²¹⁾という叫びは出るはずがないであろう。人類の輪を自ら放棄して孤立した者の、絶望と悔恨の叫びなのである。

III.

既に述べたように、人類の磁石の鎖を放れて孤立する過程にはいろいろある。だがその中でホーソンが特に「心」を失い、「知性」だけで生きることを大罪と考えていたのは、19世紀の科学万能主義の考えに危惧を抱いていたからであろう以上に、人間に深い憐れみと認識を持っていたからであろう。人間は有限であるが故に、また悪の誘惑に負けやすいが故に弱い。誰一人としてその弱さを免れる者はいない。従ってその弱い者同志が互いに許し合い、いつくし

み合って生きていかななくてはならない。そのように人類に参加して生きる時はじめて、自己の救済と同時に人類全般の救済との可能性が生れるであろう。

「孤立」に向かうか「参加」に向かうかは、各自の自由にまかされている。そのことは、1835年の「ウエイクフィールド」Wakefieldではっきりいっている。人間は原罪を捨て去ることはできない。しかし自己の自由によって「参加」に向けて努力する力が確実に与えられていることをホーソンは数々の作品で暗示しようとしているように思われる。

しかしホーソン自身の場合、「参加」への理想にもかかわらず、「孤独」に向かわざるを得ない性格が、彼の文学を暗くする一要素になっている、とよくいわれてきた。彼自身が「心」の喪失を危惧し、観察者にすぎない心配を常に持ちつづけた、といわれている。「尖塔からの眺め」Sights from a Steeple (1831) や「傘の下の夜景」Night Sketches beneath an Umbrella (1838) などに端的に見られる人生の観察者でしかない彼に、罪の意識めいたものがあつたのは事実であるかもしれない。

ホーソンが芸術家であるためには、ある程度徹底した「孤独」と「観察者であること」を必要としたが、そのことは逆に彼にある種の罪の意識を抱かせたのであろう。1844年の「美しき物の創造者」The Artist of the Beautiful は、これらの問題を吟味する主旨で書かれたものであつたのかもしれない。

今述べたことはホーソン文学にあって大きな問題であると思うので、他日稿を新たに詳しく論考を重ねる必要がある。

Notes

1) *Great Short Works of Nathaniel Hawthorne* ed.,

- by Frederick C. Crews. Ethan Brand (Harper & Row, Publishers, 1967) p. 355. 本文省略
- 2) *Ibid.*, pp. 355-6, 本文省略
 - 3) *Ibid.*, p. 357, 本文省略
 - 4) *Ibid.*, p. 360, 本文省略
 - 5) *Ibid.*, p. 360, Ethan Brand's eye quailed beneath the old man's.
 - 6) *Ibid.*, p. 362, 本文省略
 - 7) *Ibid.*, p. 362, "Peace," answered Ethan Brand, sternly, "or get thee into the furnace yonder!"
 - 8) *Ibid.*, p. 363, until, utterly exhausted, and as far from the goal as ever, the foolish old dog ceased his performance as suddenly as he had begun it.
 - 9) *Ibid.*, p. 363, 本文省略
 - 10) *Ibid.*, p. 364, "For myself, I cannot sleep," said he. "I have matters that it concerns me to meditate upon. I will watch the fire, as I used to do in the old time."
 - 11) *Ibid.*, p. 364, while deep within his mind he was reviewing the gradual but marvellous change that had been wrought upon him by the search to which he had devoted himself.
 - 12) *Ibid.*, p. 364, a simple and loving man, watching his fire in the years gone by, and ever musing as it burned.
 - 13) *Ibid.*, p. 364, what tenderness, with what love and sympathy for mankind, and what pity for human guilt and woe,
 - 14) *Ibid.*, p. 365, viewing it as a temple originally divine, and, however desecrated, still to be held sacred by a brother.
 - 15) *Ibid.*, p. 365, Then ensued that vast intellectual development, which, in its progress, disturbed the counterpoise between his mind and heart.
 - 16) *Ibid.*, p. 365, from the level of an unlettered laborer to stand on a starlit eminence,
 - 17) *Ibid.*, p. 365, 本文省略
 - 18) *Ibid.*, p. 365, the moment that his moral nature had ceased to keep the pace of improvement with his intellect.
 - 19) *Ibid.*, p. 365, Ethan Brand became a fiend.
 - 20) *Ibid.*, p. 365, "My task is done, and well done!"

21) *Ibid.*, p. 366, "O Mother Earth," cried he,
"who art no more my Mother, and into whose
bosom this frame shall never be resolved! O
mankind, whose brotherhood I have cast off,
and trampled thy great heart beneath my

feet!"

(本稿の作製にあたっては本学助教授花本金吾氏
からいろいろと貴重な助言をいただいた。記して
感謝する次第である。)